The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞金水敏『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』: 虚構のことばに対する違和感を取り除き日本語の多様性を見つめ直す
Author(s)	岐部, 雅之
Citation	Anais : Colóquio de Estudos Luso-Brasileiros. 2024, 50, p. 39-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98441
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

金水敏『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』
―虚構のことばに対する違和感を取り除き日本語の多様性を見つめ直す―

岐部 雅之

本書（現代文庫版、2023 年刊行）のあとがきによると、役割語の概念は 2000 年 11 月の著者論文で公開されたあと、『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』（単行本）が 2003 年 1 月に刊行されている。それから 20 年余りの間に日本語と英語の関係を中心に翻訳の役割語に関する研究は発展し続け、近年では日本語とポルトガル語を対象とする同分野の論文も発表されるようになった（デ ナザレ「日本語からブラジル・ポルトガル語への翻訳における『役割語』翻訳の手法：『田舎ことば』を例として」2024 年、など）。評者は大学の授業において日本文学のポルトガル語版を講読テキストに指定し、それを訳し戻す取り組み（「逆翻訳」と呼ぶ）を行っており、その課題の一つがほかならぬ役割語の扱いである。役割語というのは「特定のキャラクターと結びついた、特徴ある言葉づかい」（iv 頁、現代文庫版からの引用については頁数のみ）を指し、さらに詳しく以下のように定義されている。

> ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを『役割語』と呼ぶ。（203 頁）

この役割語を多少なりとも意識せざるを得ないのは、小説を読んだり映画を観たりなど、主にフィクションの世界を味わうときではないかと思われるが、そこに翻訳という要素が絡んでくることで役割語はいよいよ避けて通れなくなる。つまり、いかにも老人が話すようなことば遣い、いかにも女性が話すようなことば遣い、いかにも外国人が話すようなことば遣いなどを文章化する際には何らかの

工夫が施されるに違いないからである（翻訳の場合であれば、起点言語の表現が目標言語へ反映されないときもあるだろう）。有名な外国文学作品ともなれば複数の日本語訳が存在することも珍しくはなく、同一の作品でありながら翻訳を通じて幾通りも愉しむことができるのは役割語の存在が一役買っていると考えられる。

それにもかかわらず、逆翻訳を取り入れた訳読の授業において、履修生から提出される日本語訳には役割語の形跡があまり見られない。曰く、現実の老人はそのような話し方をしない、現実の女性はそのような話し方をしない、現実の外国人はそのような話し方をしないからで、結果として登場人物の特徴を平板化させてしまっている。さらに、「言語上のステレオタイプ」（35 頁）である役割語は偏見や差別に結びつきがちであるため、履修生が嫌っている面もあるだろう。とはいえ、逆翻訳の授業で日本語訳と日本語原文を比較した際に真っ先に気づくのが役割語の存在なのである。

ここで、小川洋子『博士の愛した数式』のポルトガル語版の一節と原文を比較してみよう。

> — De todo modo, entre, por favor! Eu não posso lhe dar atenção pois estou ocupado, mas esteja à vontade para fazer o que quiser.（*A fórmula preferida do Professor*, p.18）
> 「まあとにかく上がってくれたまえ。僕は仕事があるからお構いできないが、君は君で自由にやってくれたらいい」
> （『博士の愛した数式』新潮文庫、17 頁）

ポルトガル語版には感嘆符があり、博士が威勢よく話しているように感じられる一方、原文にはそれがない上に、「～たまえ」という特徴的なことば遣いも見られる。2020 年代の価値観からすると偉そうなことば遣いとの印象を受けるが（小説の時代設定は 1992 年）、一人称代名詞が「僕」であるため、日本語原文から感じられる博士の人柄は穏やかなものに響く。仮にこのポルトガル語の文について役割語を意識せずに翻訳すると、「いずれにしても入ってください！　私は忙しいのであなたに注意を向けられませんが、どうぞお好きなように」とでもなるだろうか。正答が用意されている和訳のような課題であれば減点対象はないものの、文芸翻訳としては首を傾げざるを得ない訳文になっている。やはり、物語全体の世界

観を把握し、それぞれの登場人物の個性、すなわちキャラクターを浮かび上がらせるひと手間が求められる。実際、「日本語の役割語にとって特に重要な指標は、**人称代名詞**またはそれに代わる表現、および**文末表現**である」（203 頁、太字ママ）とも指摘されており、逆翻訳を通じて日本語原文と照らし合わせることで役割語の重要性、ひいては日本語の多様性が再認識されるのである。

いくぶん手前味噌になることを承知で言えば、逆翻訳の授業には手ごたえを感じている。外国語を含む言語（ことば）に関心を寄せる履修生らが、「はじめは意味が理解できれば事足りると思っていたけれど、原文の雰囲気を壊さないよう適当な日本語を考えるのが楽しかった」と授業アンケートのコメントに残すからである。母語の日本語で読める作品をわざわざ外国語版を使って訳し直すことに懐疑的だった履修生でも、日本文化独特のものや慣用句をはじめとする日本語らしい表現が外国語でどのように表現されているのか気になり、訳文を工夫するようになる。

そこで以下では、役割語を原書講読（訳読）の授業に積極的に取り込むことで、翻訳が「縦のものを横に置き換える」機械のような単調な作業ではなく、履修生の数だけ固有の訳文ができ上がる創造的な作業であることを見ていきたい。

さて、前置きが長くなったが、『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』（岩波現代文庫）は冒頭の「役割語の世界への招待状」に続いて、次の全 6 章で構成されている。

第 1 章　博士は〈博士語〉をしゃべるか
第 2 章　ステレオタイプと役割語
第 3 章　〈標準語〉と非〈標準語〉
第 4 章　ルーツは〈武家ことば〉―男のことば
第 5 章　お嬢様はどこにいる―女のことば
第 6 章　異人たちへのまなざし

本書には「目から鱗が落ちる」ポイントがいくつもあるが、その中でも特にボロボロ鱗の落ちるのが日本語の全体像を把握する上で欠かせない現実の日本語とヴァーチャル日本語（役割語）との距離だろう。このうち、現実の日本語を扱うのが位相・位相差研究である。両者には重なり合う部分もある一方で、一般の日本語話者が有する知識の有無が決定的に異なる。要するに、現実の日本語に見ら

れる特有な様相（社会的な立場の違い、表現様式の違いなど）は「研究者がフィールド・ワークや文献の調査等の手続きを経ることでようやく明らかになる」（37 頁）が、役割語は幼少期から絵本をはじめ、漫画やアニメなどを通して蓄積された「現実に対して持っている観念」（37 頁）なのである。そうすると、翻訳において登場人物の特徴を平板化させる役割語の不在について前述した際、現実を反映した日本語ではないから訳文に反映させる必要もないとした理由は正当性を失う。なぜなら、「日本語のヴァリエーションの総体を捉えるためには、『現実』すなわち位相・位相差の観点から見ていくだけでは不十分で、役割語の観点を加えることが極めて重要」（39 頁）だからであり、このように見れば、翻訳においても現実の日本語とヴァーチャル日本語（役割語）の両面に配慮しなければならないだろう。ただし、役割語とはあくまで文化的なステレオタイプであるため、ネガティブな意味合いを帯びることがある点には配慮しなければならない。

では、なぜ一般の日本語話者は役割語の知識を持っているのだろうか。本書冒頭の「役割語の世界への招待状」のはじめに、「そうですわよ、わたくしが存じておりますわ」や「そや、わてが知っとるでえ」といった文を誰がしゃべっているのか選択肢から選ぶテストがあるが、日本で生まれ育った日本語の母語話者である評者にとっては迷うことなく正答を結びつけられるし、同じような条件の読者もそうに違いない（前者は「お嬢様」で、後者は「関西人」だろう）。現実にこのような話し方をする人がほとんどいないにもかかわらず、である。役割語の知識をいつの間にか身につけているのは、先にも触れた幼少期からの蓄積によるところが大きいが、それだけではない。「大人になって次の世代の新しい作品の作り手となり、再び同じような役割語を作品に用いる」（27-28 頁）ため、現実社会とは切り離されて再生産されるのである。なお、大人になってもこの文化的ステレオタイプが消えないのは、「サブタイプ化」（40 頁）と呼ばれる心の中の情報処理による。つまり、自分の中にステレオタイプが一度でき上ってしまうと、それに合わない対象に出くわしても単なる例外に過ぎないと見なしてサブタイプ化し、ステレオタイプ自体は揺らがないのである。言われてみれば確かにそのとおりで、だからこそ「そうですわよ、わたくしが存じておりますわ」という文はお嬢様の発言だと自信を持って言えるのであ

り、もし「そうですね、わたしが知っていますよ」と話すお嬢様が出てきたら、キャラクター性の弱いお嬢様として処理されるか、それ以前の問題として、お嬢様ではない何か別のキャラクターだと勘違いされるかもしれない。

このお嬢様ことばと関連して、翻訳をする際に頭を悩ませる「ことばの性差（女ことば、男ことば）」にも注目したい。翻訳関係のエッセイを読んでいると「てよだわ言葉」に象徴される女ことばは使いたくないが、発話者が誰かを明示したいときには使ってしまうといったもどかしさに出くわすことがある。それは社会における男女の役割の差が縮小してきている現代にあって、ことばの差異を強調することに少なからぬ抵抗を覚えるからであろう。たとえば、小川洋子『密やかな結晶』のポルトガル語版の一節と原文を比較してみる。

> "Isto aqui é um 'guizo'. Sacuda na palma da mão."
> （*A polícia da memória*, p.11）
> 「これは“鈴”。手の上で転がしてごらん」
> （『密やかな結晶』新潮文庫、9 頁）
>
> E daí a carta era enviada para onde quiséssemos. Muito, muito antigamente, era assim que acontecia.
> （*A polícia da memória*, p.11）
> そうすれば、どこへでも配達してくれたの。そんな時が、遠い昔にはあったんだよ。
> （『密やかな結晶』新潮文庫、9 頁）

これは母親が幼少期の「わたし」に語っている場面である。ことばの性差が文末表現に現れていることは一目瞭然で、“一定の基準”があるからこそ読者は発話者の人物像を想像できる。その基準は「非常に重要な概念である」（62 頁）役割語としての〈標準語〉であるが、「現実の社会に現象として現れる言語としてではなく、われわれの観念・知識として捉える」（63 頁）という点を忘れてはならない。つまり、関西弁の「あかん」に対応する標準語の「だめ」といった例ではなく、上記の引用文に絡めて言えば「手の上で転がしてみて」や「どこへでも配達してくれました」など役割

語の度合いが薄いものになろう。したがって、観念・知識としての〈標準語〉からすれば、「～ごらん」「～の」「～よ」は女性専用表現と言える（金水が疑念を抱いているように「普通体に『よ』が付く」ものはイントネーションを下降調にすれば男性的にも響き、中立的と判断できなくもない）。いずれにしても、文化的ステレオタイプは人間の観念・知識の中に強固に根を張っているため、ことばの性差は変化しつつも存在し続けると思われる。こうした状況に違和感が拭えないとしても、「社会に〈男性語〉〈女性語〉の知識が共有されている以上、作家たちはその知識に安易に寄りかかりがちになる。その結果、さらに人々の役割語の知識が強化され、子供たちへの新たな刷り込みが重ねられていく」（171 頁）のだから。ことばの差異がどれほど曖昧になろうとも、「小説の中の会話は、**小説用に再構成された虚構のことば**である」（32 頁、太字ママ）ことを踏まえれば、「私たちの役割語の知識は、現実のありさま以上に、私たちに言葉の男女差を増幅させて見せている」（171 頁）と言われても至極納得がいく。

原書講読の授業で原文の意味が理解できれば十分と考える者からしてみれば、翻訳（訳読）という作業は非効率的で時代遅れでしかない。ましてや翻訳機や生成 AI が日々発達している時代に、である。ただ、母語にしても外国語にしても、翻訳（ある言語から別の言語へ行ったり来たり）を通じて徹底的に文章を読み込みながらいろいろな解釈の可能性を検討することで、ふだんは意識せずにいることや理解したつもりでいたことに注意を促してくれる貴重な機会となろう。それがヴァーチャル日本語、つまり役割語の存在である。「役割語なくして、日本語の作品は成り立たない」（200 頁）とまで言う本書は、ことばに関するあらゆる学習にとって必携の教科書ではないだろうか。